世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『謎の特別室生徒』

第20話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第二十話『謎の特別室生徒』）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ピーター
ベッキー
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー
ジェームス
ラビニアの父親
ラビニアの母親
花売りのおばさん
野菜売りの主人
肉店の主人
○
シーザー（猫）

1

ミンチン女学院・ラビニアたちの部屋

棒立ちになったベッキーの胸に、いきなり靴が飛ぶ――

ラビニアの声「なによ、その磨き方……！」

威丈高に立つラビニアと、脇にジェシー、ガートルード。

離れてアーメンガード。

ラビニア「一体、誰が磨いたのよ！」

ベッキー、おどおどと靴を拾う。

ベッキー「あのォ……私が、丁寧にお磨きしたんでございます」

ラビニア「気に入らないわね。それで私が外出出来ると思ってんの？

誰か他に靴ぐらい磨ける人がいるでしょ」

ベッキー「え？……あの……」

ラビニア「早く持って行きなさいよ」

ベッキー「は、はい、ただいま」

ベッキー、泣き顔で出て行く。

ラビニア「フフ……これでセーラが来る筈よ」
一方で、心配そうに見守っているアーメンガード——

2
同・地下のアイロン作業場

アイロン台で、山積みの女生徒たちの服に大汗でアイロンをかけているセーラ。
アイロンを、ストーブで熱した別のと替え、指先でチョンと熱さを確かめる。

セーラ「熱ッ……」

その重いアイロンで、また服をかけはじめる。
ドアが開いて、ラビニアの靴を抱えたベッキーが、エプロンで涙を押えながら入って来る。気がつくセーラ——

セーラ「ベッキー……」

急いでアイロンを置き、近寄る。

セーラ「また、なにかあったのね」

ベッキー、泣顔で頷く——

ベッキー「ラビニアさんが……私、丁寧に磨いたんですけど……気に入らないんです」

セーラ「まあ……」

セーラ、そっとベッキーから靴をとり、布でふき直すと

セーラ「いいわ……私が届けてあげる」

ベッキー「え、そんな……」

ベッキー、急いで首を振る。

ベッキー「いけません、お嬢様……お嬢様がいらしたら、ラビニアさんの思う通りになるだけです」

ベッキー、思い切って続ける。

ベッキー「私、知っているんです……ラビニアさんは、なにかとお嬢様に、いじわるしようと待っているんですから」

セーラ「私も、知っているわ」

　　ベッキー、はっと見る。

セーラ「でも、心配しないで、ベッキー……私、そう云う事に少しづ
　　つ馴れようとしているの……いいえ、馴れて行かなければ、
　　ここにいる事は出来ないんだって、決心したのよ」

ベッキー「お嬢様……」

セーラ「大丈夫よ、ベッキー」

　　傍の靴ふきで靴を拭い直すと、

セーラ「じゃ、アイロンかけの方、お願いね」

ベッキー「は、はい……」

　　セーラ、靴を手に出て行く――

　　心配そうに見送るベッキー――

3

同・二階の階段

上って来るセーラ――ラビニアたちの部屋のドアに来て、微かにためらう。

4

同・ラビニアたちの部屋

鏡の前で、外出着で身づくろうラビニアと、左右にジェシーとガートルード。

アーメンガード「ね、ラビニア、外出するって一体どこへ行くの？」

ラビニア「（微笑）ヒミツよ」

アーメンガード「ヒミツって……？」

ラビニア「（振返る）いまに、あんたたちが吃驚するようなことが起るわ」

ジェシー「それまではヒミツよ」

ガードルード「ねエエ……」

三人、笑う

その時、ドアにノックの音。

アーメンガード「は、はい……」

急いでドアに行くと、開ける。

靴を手に、立っているセーラ――

アーメンガード「（驚く）セーラ……」

セーラ「靴を届けに来たの」

離れて振向くラビニアたち――ラビニア真っ直ぐにセーラに近づく。顔を見合せて続くジェシーとガートルード。

乱暴にアーメンガードを押しのけて、セーラの前に立つラビニア、いきなりセーラの手から靴を奪い、確める。

ラビニア「あなたが磨き直したのね」

セーラ「ええ……ベッキーが他の仕事で忙がしいので……」

ラビニアの顔に見下した微笑が浮ぶ。

ラビニア「そう……私の靴を、昔の代表生徒のあんたがね……だった

ら許してあげるわ」
ラビニア、その靴を床に落す。
ラビニア「履かせて頂戴」
一瞬、ラビニアを見返すセーラ。
顔を見合せるジェシーとガートルード。
アーメンガード「ラ、ラビニア……」
ジェシー「ノロマは口出さないの！」
ラビニア「どうしたの？……あんたは、ベッキーと同じで、私たちの為に働らくメイドの筈でしょ。さ、履かせなさいよ」
セーラ、じっと見返したが、無言で膝をつくと、ラビニアに靴をはかせる。
スカートをつまみ、得意気に足先をセーラの顔前に出して見下すラビニア。
その時、廊下に現われるアメリア。
アメリア「まあ、皆さん、なにをしてるんですの？」

途端に足をおろし、笑顔を作るラビニア。

ラビニア「あ、アメリア先生……いま、セーラが私の新しい靴を見たいと云うので、見せてあげていたんです……ね、みんな」

頷くジェシー、ガートルード。

アメリア「まあまあ、お出掛前だと云うのに……さ、お迎えに行く時間ですよ」

ラビニア「はい、アメリア先生……」

チラリとセーラに冷笑を浴せると、アメリアに続いて出て行く。

吐息で見送ったセーラ、続く。

顔を見合せて吹き出すジェシーとガートルード――

茫然と見送って立尽すアーメンガード。

5
同・表

外出姿のアメリアとラビニアが出て来ると、待たせてあった辻馬車に乗り込む。
――走り出すその馬車。

6 同・地下のアイロン作業場

同、地下のアイロン場でアイロンをかけているベッキー。
セーラが、戻って来る。

ベッキー「あ、お嬢様……」
セーラ「(微笑)届けて来たわ」
ベッキー「あのォ、ラビニアさんがなにかお嬢様にいじわるでも……」
セーラ「安心して、ベッキー」
ベッキー、怪訝に見る。
セーラ「私、思うの……いじわるって、してるその人は、本当は決していい気持じゃないでいるのよ」

7

同・二階の廊下

ベッキー「え……」

セーラ「ラビニアも、きっといつかその事に気がつく筈よ」

ベッキー「お嬢様……」

そこへ鍵束を手にしたモリーが入って来る。

モリー「ちょっと、お前たちに急な仕事が出来たんだよ」

セーラ「は、はい……」

モリー「お前さんが前にいた特別寄宿生室を使う事になったからね」

セーラ「えっ……」

モリー「院長先生が至急掃除をしておくようにって。部屋は開けといたから急いでおくれ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

出て行くモリー

茫然と顔を見合せるセーラとベッキー。

掃除道具を持ったセーラとベッキーが三階へ上って行く。
その先頭にシーザー。
×　　×　　×
一方でそっと見送って、顔を見合わせるジェシーとガートルード。

8

同・三階の特別寄宿生の部屋

入って来るセーラとベッキー。
──ガランとしたかってのセーラの部屋。
ベッキー「(泣顔) なんてことでしょう……以前お嬢様が特別寄宿生としてお使いになってたお部屋を、今度は、お嬢様がお掃除しなきゃならないなんて……」
ベッキー、エプロンで涙を押える。
セーラ「ベッキー……」

ベッキー、泣きながら首を振る。
ベッキー「私、お嬢様の今のお気持を思うと、悲しくて……」
セーラ「いいのよ、ベッキー……私、気にかけてはいないわ……さ、
始めましょう」
ベッキー「は、はい、お嬢様……」
掃除にかかるセーラと、涙を拭って続くベッキー。シー
ザー、啼く。

9 同・廊下

階段口で窺っていたジェニファ、リンダ、クリステルが、
ぱっととってかえす

10 同・二階の廊下

三階の階段から、ジェニファたちが駆け降りて来る。
心配そうに待ち受けているアーメンガード、ロッティたち。
ジェニファ「ね、ね、矢っ張り、特別寄宿生が来るらしいわよ。いま、セーラたちがあの部屋を掃除してるわ」
アーメンガード「それでラビニアが代表生徒として迎えに行ったの？」
ジェニファ「決ってるわよ……だけど、こんな大げさな事するなんて、今度はどんなお金持ちの子が来るのかしら」
ロッティ「シィッ……」
一方を見て、口に指をあてる。

× × ×

その一方――二階の階段を裾をつまんだミンチンが、気ぜわしく三階へ上って行く。

11

同・三階の特別寄宿生の部屋

掃除を続けているセーラと、ベッキー。
ミンチンが入って来る ——
ミンチン「セーラ……！」
セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン「ここは、ベッキーにやらせればよろしい……間もなく大事なお客様が見えます。市場へ行って花を求めて来るように」
セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン「それから、モリーに聞いて、特別料理の材料も忘れずに。判りましたね」
セーラ「はい、院長先生」
ミンチン、慌ただしく出て行く。
唖然とセーラと顔を見合せるベッキー。

12 同・地下の台所

ジェームスが、セーラに書きつけを渡す。

ジェームス「必要な野菜は、それだけだ」

セーラ「はい、ジェームスさん」

ジェームス「それから、ローストビーフ用の肉は、院長先生から特別に張り込むように云われてるからな。上肉を探して来るんだぞ」

セーラ「はい、ジェームスさん」

モリーが入って来る。

モリー「ジェームス……荷物が着いたよ。手をかしておくれ」

ジェームス「やれやれ、また大荷物かい」

モリーとジェームス、出て行く。

見送って、買物の篭をとるセーラ——

13 同・表

その篭を手に、地下からの階段を上って来るセーラ——

——ふっと見る。

×　　　　×　　　　×

玄関前に、家具を山積みにした大型荷馬車が停っており、

ジェームスとモリーが、それぞれ椅子や敷物を玄関口に

運び込んでいる——

×　　　　×　　　　×

じっと見守るセーラ、呟く——

セーラ「どんな生徒が来るのかしら……いい人だと嬉しいのだけど……

……」

（中　CM　）

14 コベント・ガーデン市場の風景

買出人たちの退いた時刻——

15 その一角

探しながら来るセーラ——

× × ×

一方に、野菜くずを掃き集めて働いているピーターの姿がある。

× × ×

セーラ「ピーター……」

× × ×

振返るピーター——

ピーター「やあ、お嬢さん……！」

ピーター、セーラに駆け寄る。

ピーター「そろそろ来る時間だと思ってたんです。今日の買物は？」

セーラ「それが、特別のお客様が見えるとかで、お花と野菜と、ローストビーフ用のお肉を買わなければならないのよ」

ピーター「よしきた。じゃ、まず花屋のおばさんから頼んでみますよ」

16 同・花売りおばさんの店の前

セーラとピーターの前で、エプロンを眼にあて、貰い泣きするおばさん――

おばさん「……そうだったのかい……あんたの代りに大金持ちの娘さんが来るって訳かい……運命なんて残酷なもんだねえ」

ピーター「ああ、俺、話聞いて口惜しくて口惜しくて……」

セーラ「（困惑して）ピーター、もういいのよ、その事は……」

ピーター「ええ……だからさ、おばさん、これからも、お嬢さんの為

に、力になって欲しいんだ」
おばさん「わかってるとも、ピーター……セーラさん、私しゃ、プリンセス様みたいだったあんたの姿が今でも忘れられないんだよ……さ、大サービスしてあげるよ」
セーラ「有難う、おばさん……」

17 同・野菜売りの店の前

篭に、野菜類を取り入れる主人 ―― 前に、大きな花束を抱えたピーターと、セーラ。
主　人「ええと、ジャガイモと玉ねぎと、ローストビーフ用のホースラディッシと……」
その野菜の篭をセーラに渡す。
主　人「さ、大負けに負けといたよ」
セーラ「すみません、ご主人」

主　人「それから、ピーター。肉を仕入れるならリーデンホール市場のジョージの店へ行くといいぞ。俺からだって云やあ、サービスする筈だからな」

ピーター「有難う、おじさん」

18 リーデンホール市場の風景

リーデンホール市場に並ぶ肉、肉、肉の店。
（ライフ「イギリスの料理」六七頁写真参照）

19 同・ある肉屋の前

大きな牛肉のブロックを切る主人――
前に花束を持ったセーラと、野菜籠を抱えたピーター。
主人が、ブロックを紙でくるむとピーターに渡す――

主　人「さ、大サービスだぞ。ウィリーの奴によろしくな」
ピーター「ええ。有難う、ご主人……」

20

ミンチン女学院・前の広場(スクエア)の中

通り抜けて来るセーラとピーター。
ピーター「しかし、特別寄宿生室をお嬢さんに掃除させるなんて、ミンチン先生もひどすぎるなあ」
セーラ、淋しく笑って首を振る。
セーラ「私、別になっとも思っていなくてよ……だって、それが私に決められた運命なんですもの」
ピーター「お嬢さん……」
セーラ「じゃ、ここで」
野菜と肉の篭を受取る
ピーター「では、頑張って下さい」

セーラ「有難う、ピーター。おかげでとても助かったわ」

21 同・表

花束と篭を抱えたセーラが道を横切る。
一方から蹄の音が近づき、セーラの傍を通った豪華なホテルの四輪馬車が、玄関前に停る。
思わず立停って見るセーラ――

× × ×

馬車の扉が開き、洋服や帽子の箱を抱えたアメリアが降りる。続いて、いかにも成金風のアメリカ紳士。そして、派手な粧いの夫人と、着飾ったラビニアが降り立つ――

× × ×

愕然と見るセーラ――

セーラ「ラビニアが……………！」

22

同・二階の出窓

大騒ぎで見おろしているジェニファア、リンダ、クリステル、アーメンガード、ロッティ以下の女生徒たち。

ジェニファ「見て、ラビニアの服」

リンダ「凄い！」

ジェニファ「特別寄宿生室に入るの、ラビニアだったのよ」

クリステル「あの人、私たちを吃驚させようと思って、わざと内緒にしてたのね」

――茫然と顔を見合せるアーメンガードとロッティ。

23

同・地下の台所

花束をテーブルに置いたセーラの前で、篭から取り出した牛肉ブロックの臭いを嗅ぐジェームス。一方にベッキ

ー。

ジェームス「ふうむ、こいつは今までここじゃ買った事のねえ程いい肉だぜ」

ほっとベッキーと顔を見合せるセーラ。

そこへモリーが慌ただしく入って来る。

モリー「ジェームス、ラビニアさんの御両親がお着きだよ、特別料理にかかっておくれ」

ジェームス「ほいきた」

モリー「だけど大変だねえ。これでまた院長先生のラビニアさんの扱いがガラリ変るだろうからね……あ、セーラ、応接室にお茶を運んでおくれ」

セーラ「はい、モリーさん」

モリー「それから、ベッキー……この花を特別寄宿生室に飾るんだよ」

ベッキー「は、はい、ただいま……」

24 同・一階の廊下

応接室の前に群がって中の様子を窺っているジェシー、ガートルード、女生徒達。

×　×　×

一方から、紅茶の盆を運んで来るセーラ、離れたアーメンガードとロッティが、心配そうに駆け寄る。

ロッティ「セーラ・ママ……」

アーメンガード「ラ、ラビニアが……」

セーラ「え、ええ……知っているわ……」

じっと応接室のドアをみつめる――

25 同・応接室

笑顔のミンチンと、脇に立つアメリアの前に、ラビニア

を挾んで得意気に喋るダイヤの指輪を光らせた母親と、

父親——

母　親「ホホホ、そうなんざますの、院長先生。なにしろ、主人の油田が大当りしてからってもの、大統領のパーティにまでお呼ばれするようになりましたでございましょ。もう体がいくつあっても足りないくらい……」

アメリア「まあ、大統領のパーティに……」

ミンチン「素晴らしい事でございますわ。そのような立派な方が後援者になって下されば、この学校としてもどれ程心強いか……」

父　親「はっはっは……それでまあ、以前から娘が希望しておった通り、特別室に移らせてやりたいと……」

ミンチン「お手紙で承知致しておりますわ……お部屋も御希望通り整えておきました」

その時、ノックの音——

ミンチン「お入り……」
ドアが開き、紅茶の盆を手にしたセーラが入る——一
瞬、ラビニアと眼が合う。
得意気に見返すラビニア——
セーラ、見たが、無言でテーブルに紅茶の盆を運ぶ。
ミンチン「セーラ……そのラビニアさんのお洋服を特別寄宿生室にお
運びしなさい」
セーラ「はい、院長先生……」
セーラ、隅に置いた帽子と服の箱に行く。
そのセーラに、母親の声がかぶる——
母親の声「兎に角、この子ときたら次から次にまるでプリンセスみた
いに買物をさせるんでございましょ。呆れてしまいました
わ、ホホホ」

26
同・廊下

ドアが開く――一斉に飛びのく女生徒達。
山のような箱を抱えたセーラが出て来ると一方へ――
囁き合うジェシーたち。

27 同・三階の廊下

箱を抱えて上って来るセーラ――

28 同・特別寄宿生室

花瓶に不器用に花を差しているベッキー。
セーラが入って来る――
ベッキー「あ、お嬢様……私、うまくいかなくて………」
セーラ「手伝うわ。ベッキー」
セーラ、箱を置くと、ベッキーに代って花をいけはじめ

る。

ベッキー「お嬢様……こんな事云ってはいけないのかも知れませんけど……」

セーラ、怪訝にベッキーを見る。

ベッキー「私、口惜しいんです……お嬢様がこんなお仕事をしなきゃならないなんて……」

セーラ「（微笑）ベッキー、もうその事は云わない約束よ。さ、向うの部屋にも飾らなくては……」

ベッキー「は、はい、お嬢様……」

29 同・一階の廊下

ぱっとドア前から散る女生徒たち――

ドアが開き、父親とミンチンが出て来る。

父親「はっはっは……では、娘の部屋を拝見致しますかな」

ミンチン「どうぞ、こちらへ……」

続いて出て来る母親とラビニア、アメリア——一方へ。

のっそり続くシーザー。

×　×　×

見送ったジェシーたち、一斉に続く。

30 同・特別寄宿生室の寝室

新しくベッドや家具の入った部屋で、花瓶に花を飾るセーラとベッキー。

隣室に、ラビニアの父親の高笑いが入って来るのが聞える。

はっとなるセーラとベッキー。

31 同・特別寄宿生室

様々の家具の入った部屋を見廻す両親とラビニア。傍にミンチンとアメリア。

父　親「いやあ、結構結構……ラビニア、これで満足の筈だぞ」

ラビニア「ええ、パパ……」

寝室からセーラとベッキーが出て来る。

ミンチン「セーラ、ラビニアさんの寝室は整ってますね」

セーラ「はい、院長先生……」

ラビニア「ママ……」

ラビニアが、母親を突つく。

母　親「あ、そうそう、もうひとつお願いがあるのを忘れておりましたわ」

ミンチン「なんでございましょう」

母　親「実は、この子が、専用のメイドが欲しいと申していますの」

ミンチン「まあ……」

母　親「勿論、費用はこちらで持ちますが」

ミンチン「よろしうございますわ。それで、メイドにお心当りは?」
母　親「ええと……確か、セーラとか申しましたわね。あの子を娘の専用メイドに廻して頂く訳には参りませんでしょうか」
ミンチン「(驚く)セーラを……」
愕然と見るセーラと、ベッキー。
ラビニア、冷笑して見返す――
母　親「見た所、娘の役に立ちそうですし、娘もとても気に入っているようなんざますのよ」
アメリア「お、お姉様……」
流石にうろたえるミンチン――
父　親「なにか、具合の悪い事でもありますかな」
ミンチン「いえ。でも、あの子は、その、聞いてみませんと」
父　親「なるほど、あのメイドにも聞いてみる必要がありますな……君、どうかね。うちの娘の専用メイドに廻って貰えると有難いのだがね」

ベッキー「（低く）お、お嬢様……」
　セーラ、ミンチンとラビニアを見る。
ミンチン「セ、セーラ……決めるのは、お前です……お前の気持ち次第でいいのです」
　鼻をうごめかすラビニア――
　セーラ、じっとラビニアを見、ミンチンを見返す。
セーラ「お引受け……致します」
　微笑するラビニアと――両親。
　顔を見合せるミンチンとアメリア。
ベッキー「お、お嬢……」
　セーラ、静かにミンチンとラビニアを見て続ける。
セーラ「もし、ラビニアさんが、以前のクラスメートを御親切にも専属メイドにしたいと考えているのでしたら……」
ミンチン「セ、セーラ！」
　きっと見るラビニア――

母　親「な、なんですって？」

父　親「院長先生……これは一体どう云う事です」

ミンチン「い、いえ。この子は、父親を失くして私どもで親代りになっている生徒でございまして……それで、その……」

父　親「ふうむ……ラビニア、お前の手紙にはそんな事は一切書いてなかったぞ」

ラビニア「だって、パパ……」

父　親「判った……ラビニア、私はお前の昔のクラスメートにもう少しで恥知らずな頼み事をしてしまう所だったぞ……院長先生、娘に専用メイドなどつける必要はありません」

母　親「あなた……」

父　親「いや、構わん。院長先生、娘の為にもこの話はなかった事にして頂きますぞ」

ほっとなるミンチンとアメリア――ベッキー。満足気に尾を振るシーザー。

じっとみつめ合うセーラとラビニア——　夕食の振鈴が鳴る。

32

同・地下の食堂（夕景）

アメリアの監督で、食事をしている女生徒たち——空いているラビニアの席。

33

同・ミンチンたちの食堂（夜）

豪華なローストビーフの塊りのテーブルを囲んで、ミンチン、ラビニアと両親。

黙々と食べるラビニア——

セーラの声「ラビニアに対する私の答え方は、決して素直とは云えませんでした」

34

同・地下の作業場（夜）

テーブルで、泣顔で粗末なパンを食べているベッキー、

セーラを見る。

並んで、じっと皿のパンをみつめているセーラ——

セーラのN「……でも、あのラビニアのたくらみを避けるには、あのように云うしか私には他に方法がなかったのです……」

（第二十一話　終）